

〔目的〕小・中・高における家庭科教育のあり方について、近年、社会の変動に伴い、その方向性についての議論が活発である。また、女子の大学進学の際に、専攻分野として家政及び保育を選択する者はけっして少なくはない。彼女たちにとって、高校までに受けてきた家庭科教育は、大学の進路決定に際して、一体どのように関連し、影響を及ぼしているのだろうか。このような視点から、家庭科教育の受け手側の分析とともに、家政あるいは保育を選択した要因について、その関連性を明らかにしたい。

〔方法〕A女子短期大学家政学専攻学生578名、B女子短期大学家政学専攻学生243名、C保育専門学校学生197名の計1018名を対象として、質問紙による調査を行なった。質問項目は、高校までの家庭科教育について及び現在の専攻学科についての計19項目である。

〔結果〕①小・中・高を通じて家庭科は「好き」が最も多く、小学校では5割を占めるが、中・高と進むにつれて「つまらない」「勉強の息ぬき」が次第に増加する。②印象に残っている授業は、小学校で食物について、中学校で被服についてが多く、食物・被服以外の分野は、小・中・高と進むほど確実に増加し、一方、「なし」の回答も増加する。③現在の進路の決定者は「自分」が9割を占め、家政系と保育系の差はないが、進路決定の際の理由として「専攻内容」を挙げる者は家政系(80.3%)に比べて保育系(93.9%)が多い。④進路決定の際に高校までの家庭科が影響しているとした者は、家政系で18.1%、保育系で17.3%であり、影響していないとする群に比べて家政系保育系ともに、高校の家庭科は「好き」、現在の専攻学科の魅力として家政系で「家庭で役に立つ」保育系で「今後のキャリアの基礎」を挙げる率が高い。